

ある集団における人々のらいに対する考え方と態度

尾坂 良子, 高桑 明子*, 長谷川 悦子**,
山崎 尚美***, 中井 栄一****

The Conception and Attitude of the People in Some Limited Groups to Leprosy

Ryoko OSAKA, Akiko TAKAKUWA*, Etsuko HASEGAWA**,
Naomi YAMAZAKI*** and Ei-ichi NAKAI****

ABSTRACT: The authors conducted a survey on the conception and attitude to leprosy using questionnaire in September of 1982. The social groups examined were university students and one of their parents, and the persons staying in a home for the aged.

The source of the information about leprosy was the massmedia for 40.2% of the persons. Many persons had obtained knowledge on the severe and miserable social situation of the patients before and during the World War II. Eighty-six percent of the persons had had no contacts with such patients and they seemed to build up the body picture of the patient only with the visualization of the image and an emotional shade.

Half of those surveyed thought that the disease was infectious. Concerning the social contact in society, the aged persons seemed to show flexibility in the opinion while those in the middle-aged group showed a negative attitude.

Though the present results can not be generalized to the whole society, they may partially reflect the present general attitude toward leprosy.

Key words: leprosy, conception and attitude, questionnaire.

京都大学医療技術短期大学部看護学科

Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University

* 京都府立洛南病院

Kyoto Prefectural Rakunan Hospital

** 関西医学検査センター, 京都

Kansai Medical Laboratory Center, Kyoto

*** 松下電器健康保険組合, 松下病院

Matsushita Electronics Insurance Organization, Matsushita Hospital

**** 国立療養所長島愛生園

National Leprosarium, Nagashima Aisei-en

1984年7月17日受付, 同年8月30日受理

は じ め に

現在、我国の療養所に入所しているらい患者の約80%は既に病気が治癒した「もと患者」であり、36%は第2次世界大戦終結以前に隔離収容された人々である¹⁾。現在は61才である入所者の平均年齢が年々高くなり、それに伴い一般的成人病及び老人性疾患の発症頻度が上昇するであろう将来を考える時、らい患者或いは、らいは治癒したが身体的変形や機能障害を残している人々のための各科診療のインテグレーションの充実が焦眉の問題であることは論をまたないであろう。最近の療養所内の死因順位は悪性新生物、心疾患、脳血管障害、肺炎となっている²⁾。入所者がこれらの疾病に罹患しても、一般病院や専門病院での適切な受診の機会に恵まれなかったり、治療が受けにくい等の問題がしばしば聞かれる³⁾。適切な医療が受け難いという事実はある意味では現在の一般社会の、特に医療従事者のらいに対する考え方を反映しており、そのことが患者のための医療のインテグレーションに大きな影響を与えているであろうと考えられる。

本調査の目的は一般社会の人々のらいについての考え方並びにその内容を知ることにより、本調査の結果はらいという疾病を正しく理解し、らい患者または「もと患者」に適切な医療を期する上で大きな意義をもつものであろうと思われる。本報では医療従事者の周辺部分を形づくる一般社会の人々のらいに対する認識の程度を質問紙形式により調査し、分析、考察する。

対 象 と 方 法

調査は1982年9月1日から25日にわたって質問紙形式によっておこなった。対象は近畿地方の教育施設、社会福祉施設の中から適当に選定した。その内容は大学諸学部学生（医、工、経）、及び医療技術短期大学部学生とその両親のいずれか、老人いこいの家定例行事に参加する老人及び老人ホーム入園者の計300名であった。年齢によるらいに対する考え方、態度の差

を社会、歴史的背景との関連性において考察するために対象を、

- ・青年（19～29才）群、らいを直接的に知らないと思われる群。
 - ・壮年（30～59才）群、第2次世界大戦前後の心理的、社会的混乱期にらい対策実施の状況を通してらいを知っている群。
 - ・老年（60～）群、警察主管時代に始るらい対策の歴史的事実を通してよく知っている群。
- の3群に大別した。

尚、記述方式によって得られた対象のらいに対する具体的な意見のいくつかを、内容的に分類して本論の末尾に掲出した。

質問の骨子は下記の4項目である。

1. どのようにしてらいを知ったか
2. らいに対する病像観
3. らいについての治療観
4. らい患者との交流

結 果 と 考 察

有効回答者数は244名で回答率81.3%であった。内訳は男性127人、女性117人で各群の男女比は青年群1.2:1、壮年群1:1、老年群1.1:1であった。青年の86.6%は大学生（短大生を含む）で、壮年男性の84.4%は会社員または公務員、女性の71.1%は主婦であった（表1）。

1. どのようにしてらいを知ったか。

各群におけるらいの既知率をみると、総数244名中の97.1%で、青年は82人中97.6%、壮年は90人中の100%で、歴史的年令的に一番よく知っているとおもわれる老年群では72人中の93.1%であった。らいを知った時期は青年群では小学校就学以前が15.9%で、小学校時代17.1%、次で中学校、高校と成長するに従いその比率は高くなっているが、小学校就学以前に限ってみると、壮年群32.2%、老年群25.0%で青年群15.9%に比して高い比率を示した。壮年群の8.8%、老年群の33.3%では第2次世界大戦前後におけるらい患者に関する種々な報道、例えば患者の利用した交通機関の消毒、患者や家族

Table 1 The number of the people according to the sex and age groups

Sex \ Groups	Young group (19-29 y. o.)	Middle aged group (30-59 y. o.)	Aged group (60 y. o. -)	Total
Male	45 35.4%	45 35.4%	37 29.1%	127
Female	37 31.6%	45 38.4%	35 29.9%	117
Total	82 33.6%	90 36.9%	72 29.5%	244

の悲惨な状況を新聞記事で、或いは父母や身近な人達からの情報によって知っており、らいに対する強い恐怖感を抱いていると考えられた。当時の社会におけるらいの状況を知っている壮年群、老年群と、らいの実情をほとんど知らないとおもわれる青年群の間には明確な相違があった(表2)。

らいを知った情報源に関しては青年群の場合、小説、新聞、テレビ等のマスメディア61.0%、次で学校内交友19.5%であったが、これらの情報源は壮年、老年群では低率であった。壮年、老年群で高率を示したのは両親や身近な人達からの伝聞であった(図1)。いずれの群においても情報提供者が「父または母」「祖父母」等、日常生活において密接な関係をもつ者であればあるほど、就学以前の子供達に与えられる情報の内容は確信をもって受けいれられ、情報提供者の価値観やその時の態度がそのまま記憶の中に定着し、後にまで大きな影響力を与えて

いるものと考えられた^{4,5)}。

各群において実際にらい患者との何らかの直接的な交流の経験をもっていたのは、青年82人中の1人、壮年90人中16人、老年72人中17人で総数244人中13.9%であった。従ってらいに関する情報はマスメディアや、他者からの伝聞によるものであることがわかった。

2. らいに対する病像観

更にらいをどのように把握しているのかを「らい患者との交流の経験をもつ」A群と、「交流の経験をもたない」B群との対比でみると両者共に皮膚症状、顔面症状などが過半数を占めているが、A群で四肢の知覚異常、四肢の変形などがB群に比して高率であった。らいを経験的に知らない対象者では単に情報によって情緒的に形成された病像があたかも経験的に得られたものとして、把握認識されているのであろう(図2)。

らいは何故発症するのかについて上記の如く、

Table 2 The time when they became to know the leprosy

Sex \ Groups	Young group		Middle aged group		Aged group		Total
	Male	Female	Male	Female	Male	Female	
before reading	7	6	14	15	10	8	60
in primary school	9	5	10	9	6	9	48
in junior high school	7	9	4	8			28
in senior high school	11	5	2	1			19
before and in the world war II			3	5	6	3	17
after the world war II			6	2	7	8	23
no reply	23		11		15		49
Total	82		90		72		244

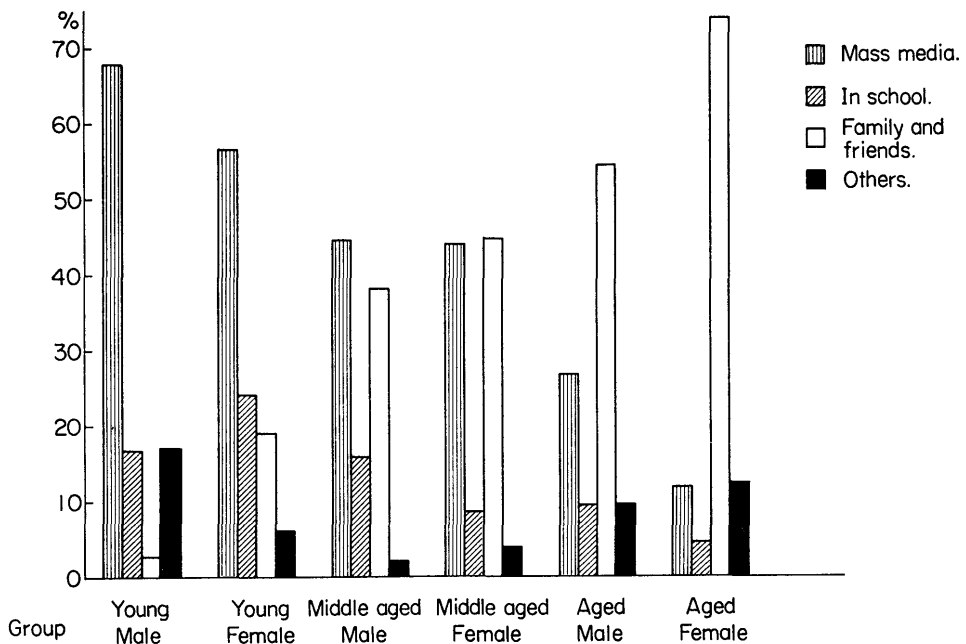


Fig. 1 The route by which they became to know the leprosy

A, B両群の対比でみると、A群では体質、遺伝によるとするものが30.6%とB群に比し高率であった。これはA群に壮年、老年が多く、らいは家系的なものであるという認識をもっていたことによるものであろう(図3)。

1873年にノルウェーのハンセンによってらい菌が発見されて以後も、長い間「らいは遺伝病、らいは不治の病気、らいは強烈な伝染病」⁶⁾とする考えが根強く残っており、その考えをより強固にしたに違いないらい患者の強制収容政策、及びらい治療確立以前の視覚的イメージが壮年、

老年群におけるらいに対する認識に大きな影響を与えてきたことと思われる。我国のらいに対する衛生行政が警察から保健所に移管されたのは第2次世界大戦終結後の1947年であり、それ以前のらい取締衛生行政はまことに厳しいものであった^{7,8)}、また、第2次世界大戦前後の社会状況下における不確実ならいに関する情報は人々をまどわせたが、その影響も決して過少評価されてはならないであろう。

3. らいについての治療観

らいの治療についてA, B両群の対比でみる

	Symptoms of the skin.	Sensory disturbance of the extremities.	Deformity of the face	Deformity hands and feet.	Others
Group A	35.1%	13.5%	27.0%	21.7%	2.7%
Group B	45.7%	9.6%	22.5%	13.6%	8.6%

Fig. 2 The symptoms by which they recognize the leprosy patients

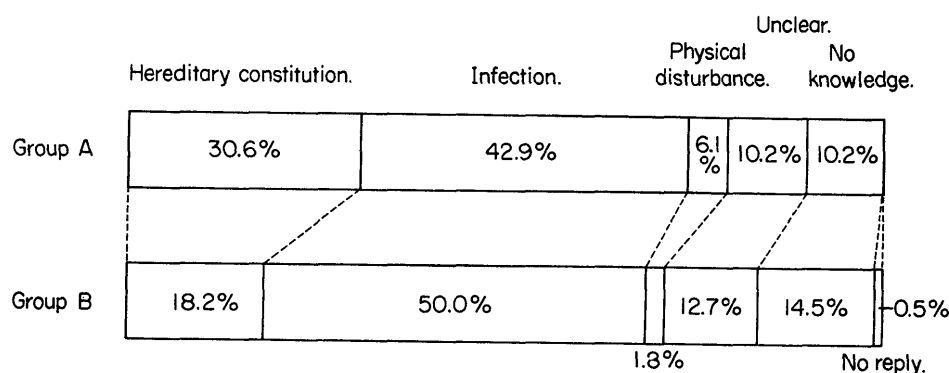


Fig. 3 The cause of the leprosy disease

と, A群では「治る」と思っているものは僅か14.7%であり, 否定的な考えをもつものが高率を示した。A, B両群において「治らないであろう」と思っているものの方が高率であるのは専門家の種々な啓蒙運動や雑誌, 専門書などによって得られる知識と, 対象の認識との間の落差の大きさを示唆しているようである(図4)。

4. らい患者との交流

地域社会において, もし, 自分の居住する近くにらい患者, またはその家族が住んでいるとして, 彼らとの近所つきあいをどうするかについては, 青年男性群では「気になるがつきあいはする」は31.8%と低かったが, 青年女子群では同一質問に対しては54.1%と半数以上に及び, 他の群にくらべても極めて高い結果を示した。このことは男性よりも女性の方が地域社会において周囲に気を配り, 心のやさしさをもっているということであろうか。壮年群では「普通に

つきあいをする」8.1%と極めて低く, 「全くつきあいをしない」16.2%と高くなっていた。地域社会における各群の役割からみると, 壮年群には社会的役割, 家族の中心的存在としてそれに付随する責務等が強く求められることと相俟って, 幼児期から徐々にかつ確実に形成されてきたらいについての固有のイメージ, 例えばらいは遺伝的疾患であるとか, らいは治癒しないとかいう家族に大きな影響を及ぼす考え方を, 新しい知識や認識によって訂正することがないまま経過したことを示すものであろう^{4,9)}。一方, 老年群では「わからない」18.2%, 「無記入」14.5%で, 「全くつきあいはしない」は14.5%と壮年に比して少なかった。老年の社会的, 家族的役割からみると労働や社会的地位, 責任からの解放があり, その結果個人中心の生活となり, 近隣との交際もこれまでのように直接に日常生活の問題になってこないであろう

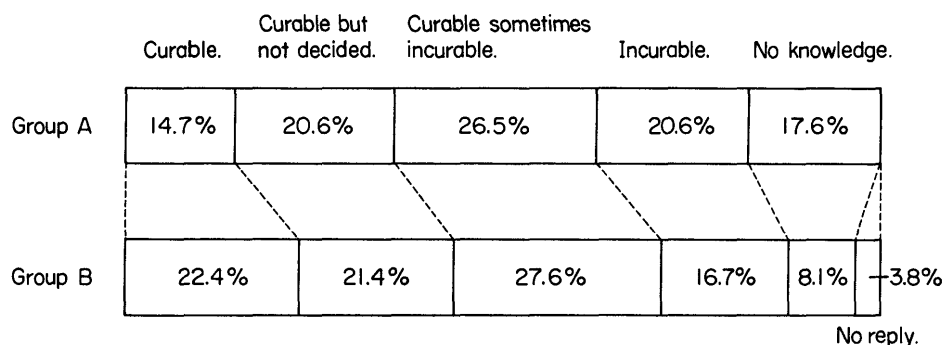


Fig. 4 Prognosis of the leprosy disease

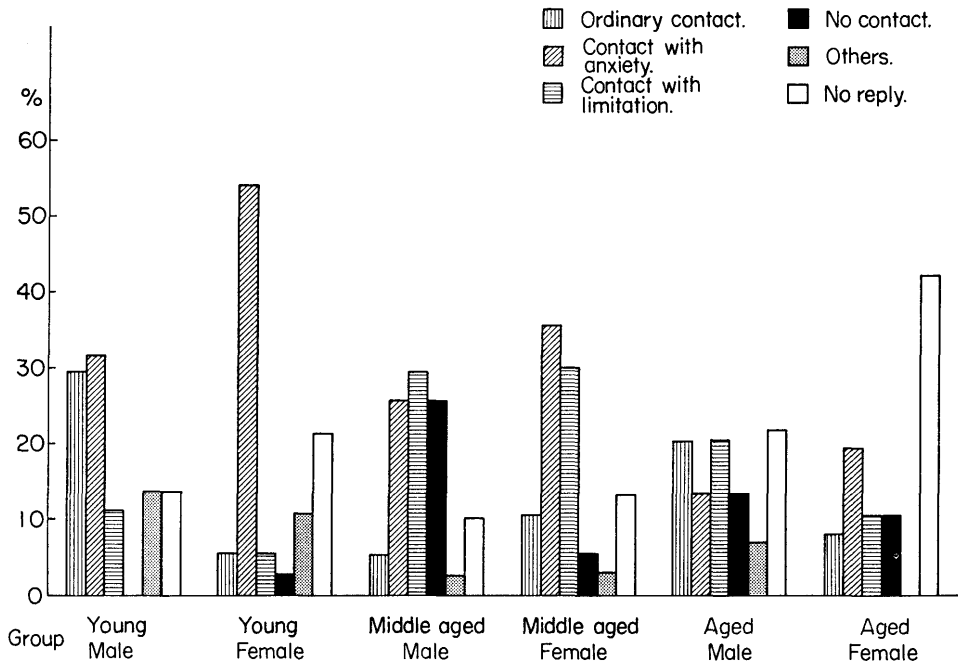


Fig. 5 Social contacts with the leprosy patients as the neighbours

う^{10,11)}。老年期には「老いる」ということによって他者を思いやる心情が強くなる同情型と、他者に無関心になり、その表現のひとつとしての拒否型との二型がみられる。壮年、老年群と共にらいに対する病像は主観的、感情的なものであった。老年群は地域社会での交流については柔軟性を示し、壮年群は前述した如く歴史的に形成されたらいの病像観による拒否的態度を明示していたといえよう（図5）。

本調査の対象者244人中79.5%は、らい患者及びらいから治癒した人達が、らい専門の療養所に入所していることを知っていた。身体上の苦痛は医学的に治療することができるであろう。しかし、取り除くことの困難なものはらいに対しての主観的、感情的に歪曲された認識に基づいて与えられる苦痛である。らいの病像把握において恐怖を強めたであろう強制的収容隔離、また、らい予防法など一連の政策はその時代に必要な政策であったとしても、今日に尚、問題を残す核となっているとすれば、その問題解決への働きかけもまた、時間をかけてなされなけれ

ばならない。らいを病んだが故に限られた医療に甘んじなければならない理由は何もない^{5,12)}。

らいを病んでいたという事実、また、治癒後に尚残る種々な身体的障害の故に、らい以外の疾病についても適切な医療を受けにくいという現状に対しては、一般社会の人々よりも、むしろ医療に従事する人々が持ち得るらいについての正しい理解が解決のいとぐちを与える筈である。らいの専門分野では周知の「らいは根絶できる」「らいは治癒する疾病」という認識が他の医療分野の人々にまで浸透していないようである^{3,13)}。医療分野で働く人々がらいについての正しい理解を得、一般医療機関でらいの患者を受け入れるようになってはじめて、地域社会の人々にもらいについての考え方、態度の変容を期待することができるであろう。

今回の調査では以上の他に記述方式で種々の意見を求めた。その中で代表的なものを数例記載する。

1. 病気への不安。

・78才、女性：らいは遺伝病と聞いており、絶

対に結婚は避けるよう幼時から教えられていた。不治の病といわれていたが後で伝染病とわかった。私のような高令者はこの病気に対する恐怖心がいまだに頭の中にあります。結核と同じに遺伝ではなく伝染病で治癒可能である事を大々的に知らせる事が必要ではないかと思っています。

- 72才，女性：10～20才の頃，患者が利用した電車や車を消毒したことを新聞で知り，乗り合せて接触し感染しているのではと不安感がありました。
- 48才，主婦：最近，余り耳にすることもなく隔離されているので安心ですが，病気の人が近くにいては困ります。

2. 同情的な意見。

- 70才，女性：昔，患者と接した父母から悲惨な話を聞いて恐しいと思った。治って社会復帰しても家族のもとへ帰らず1人でひっそりと生きている様子をテレビでみました。本人も家族も大変気の毒に思います。
- 学生，女性：最近，らい療養所の本を読みましたが入所している方の苦悩には，社会から「隔離されている」「見放されている」という重さを感じられた。偏見はなかなか変らないと思うが，自分達から改めていかねばと思う。
- 39才，女性：数カ月前，小説で外国の女性，宣教師が熊本県にらい療養所をつくったという事を知りました。患者と親しく接しても伝染もせず長生きしますから，らい病は清潔にして手当をきちんとすれば社会復帰できるのではないのでしょうか。
- 72才，女性：らい患者又は家族のために協力してほしい，お願いします。自分が患者であればと思うと他人事でなく大変気の毒に思います。

3. 積極的な意見

- 40才，主婦：らい患者と実際に交流の経験はないが，感染してから発病までの期間が長いと聞いている。気味の悪い病気というだけで偏見をもつ人が多いのは，教育の在り方に問

題があるような気がする。

- 70才，女性：少し前，保健所で「ハンセン病は治る。一般患者として通院できる病院もある」という内容のパンフレットを見たように思います。皮膚病と聞いているが遺伝ではなくとも体質が遺伝するのではないかと思っています。
- 学生，男性：この病気の社会復帰の問題は知らなかった。難しいと思うが知識の普及を図ること，それをどう理解させ得るかが問題だなと考えさせられた。
- 学生，男性：らいにしても精神病にしても地域の偏見をなくすことは難しい。本当のことを宣伝してまわるボランティア組織，地域活動が必要であらう。

これらの意見は調査の設問に対する回答をよく反映している。以上の他にらいの実情を知りたいという意見が多数あった。

結 語

歴史的にみると，ある社会がらいという疾病をどのように考えていたかによって，らい対策の基本が決定づけられてきたように思われる。その対策に沿って必然的に形成されたらいに対する考え方は，今日も尚，一般社会の人々の種々な行動を裏付ける不変の影響力を及ぼしている。我国における80年のらい治療史の中で，ある意味では患者は保護されてきたようにみえるかも知れないが，一方では明らかに対策の犠牲ともなったことは否定できないであろう。

現在，我国のらい患者の医療の大部分はらい専門の療養所の中で行なわれている。そのためらい患者のらい以外の疾病に関する治療及び健康管理の面は決して充分ではないであろう。らい以外の種々な疾病に応じて一般病院での医療を可能にするような対策をたて実施することは，らいを正しく理解すると共に緊急を要する大きな課題であらう。

本論文は制限されたいくつかの集団を対象としたものであるから，ここで得られた結果が直ちに一般社会へ拡大されるものではないが，現

在の社会におけるらいに対する一般的な考え方、態度の幾分かは正しく反映されているとおもわれる。

文 献

- 1) 藤田真一：新患ゼロの日近いハンセン病，なお根強い偏見と差別．朝日新聞(夕)，p. 3, 1983. 2. 9.
- 2) 佐々木紀典，上田フサ：全国療養所における昭和54年度の癩患者の死因調査ならびに剖検報告．日本らい学会雑誌 51：44-52, 1982.
- 3) 福西征子，杉山和子，今泉正臣，長尾栄治，松本淑子，畠 省吾：国立療養所大島青松園における入院委託治療の現状 1978年から1980年度にかけて．日本らい学会雑誌 51：28-33 1982.
- 4) Allport. G. W.：(原谷達夫，野村 昭訳)，「偏見の心理」，p. 112-212, 243-384 培風館，東京，1978.
- 5) 小島蓉子：社会・文化的環境—社会意識と偏見の史的・社会心理的考察一，「社会リハビリテーション」，小島蓉子編，p. 172-188，誠信書房．東京，1981.
- 6) 小笠原 登：癩に関する三つの迷信．診断と治療 18：1931.
- 7) 高島重孝：らい百年史年表，「国立療養所史(らい編)」，厚生省医務局療養所課内国立療養所史研究会 p. 11-33, 1975.
- 8) 植園八蔵：らい対策立法の展開と福祉．「国立療養所史(らい編)」，厚生省医務局療養所課内国立療養所史研究会 p. 88-93. 1975.
- 9) Goffman, E.：(石黒毅訳)，「スティグマの社会学」，p. 75-91, 207-227, せりか書房，東京，1980.
- 10) 那須宗一：老年期の概念，「老年学」，長谷川和夫，那須宗一編：p. 24-30，岩崎学術出版社，東京，1975.
- 11) 袖井孝子：老年期の労働，「老年学」長谷川和夫，那須宗一編：p. 393-404. 岩崎学術出版社，東京，1975.
- 12) 三沢義一：障害のもたらす心理的影響，「社会リハビリテーション」，小島蓉子編，p. 253-266，誠信書房，東京，1981.
- 13) 中井栄一：未発表資料